

# 史跡・今城塚古墳

— 平成12年度・第4次規模確認調査 —



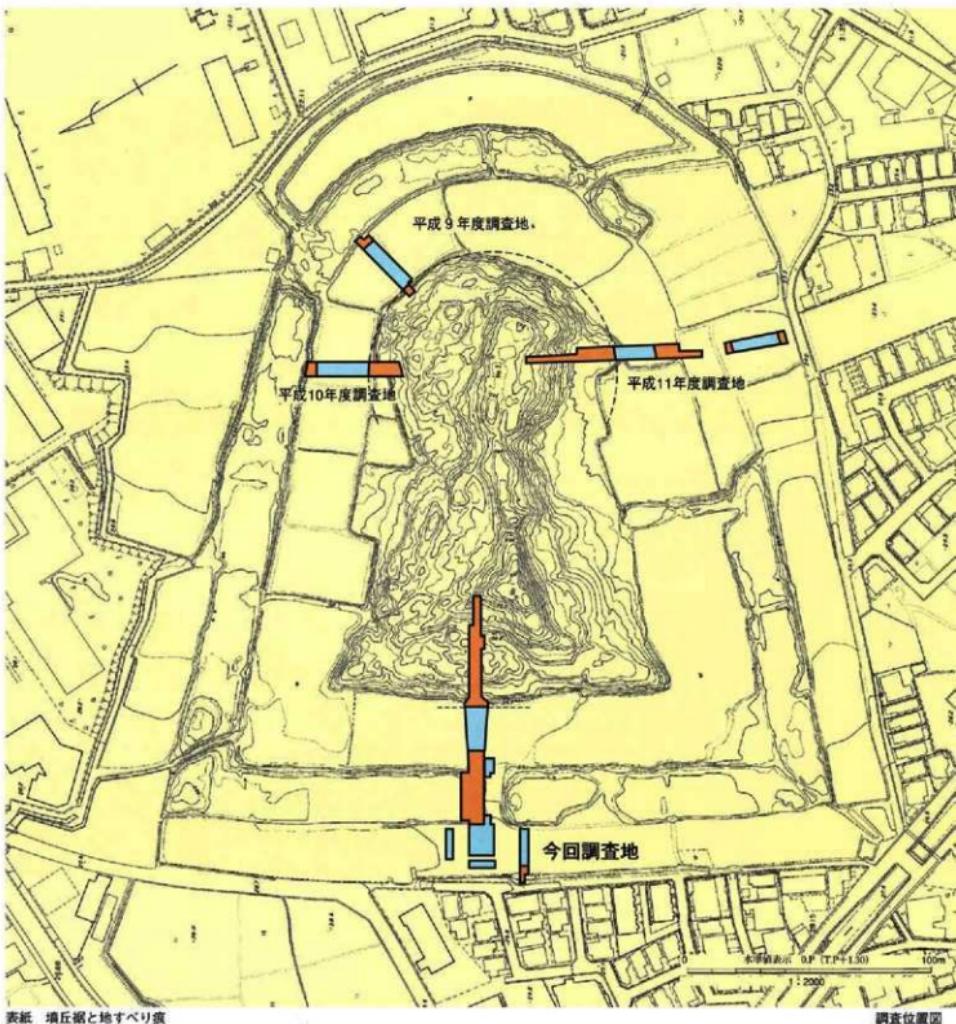
2001

高槻市教育委員会

## はじめに

今城塚古墳は6世紀前半に築造された三島地域で最大級の前方後円墳です。東西方向を向いた墳丘の周囲は二重の濠と堤が巡っています。

「今城」の名は、戦国時代に古墳を城砦として利用したことに由来しています。築城時には墳丘が大きく改変されたり、濠も大部分が埋められてしまい、古墳としての姿は変貌してしまいました。このため、古墳本来の姿を探り保存整備に必要な各部のデータを得ることを目的とした規模確認調査を実施しています。第1次調査（平成9年度）～第3次調査（平成11年度）については、後円部を中心とした各部の遺存状況や形状の把握がおもな目的でした。この調査によって古墳の規模や形状に関するデータを得るとともに、永禄11（1568）年に摂津へ侵攻した織



田信長の今城山城築城による改変をも想定できるようになりました。

今回の第4次調査は前方部及び内濠から外濠にかけての形状や遺存状況を把握するため、前方部西側前面で調査を行いました。

### 墳丘

前方部では墳丘の盛土と古墳築造時の旧地表（地山面：標高約24.8m）を確認しました。盛土は縦横各40cm前後、厚さ約10cmの小土塊を旧地表上に幾重にも積み上げていました。土層断面の観察では、一部の土塊の長辺が水平に積まれていた以外は墳丘側で東へ、内濠側で西もしくは東に向かって傾斜・褶曲した状況を示していました。盛土中には大小の亀裂が縦横に走るうえ、地山面との境には地滑りの痕跡（すべり面）を明瞭にとどめています。

墳丘裾には一辺が0.2~0.8mを測る大きな礫がいくつも滑落しており、本来は内濠の水際を巡る列石であったと考えられます。



調査区全景（東側から）



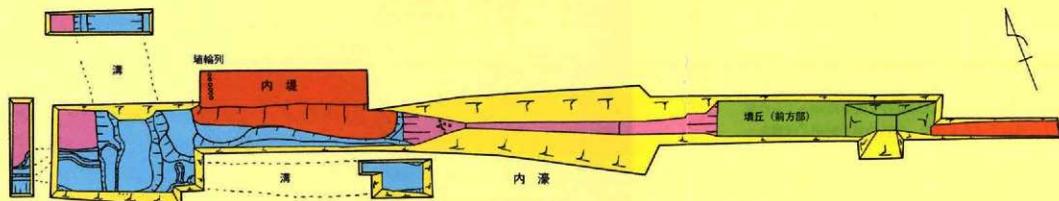
前方部の盛土とすべり面



内濠西半部（南東側から）



内濠東半部（南側から）



調査区 平面図・断面模式図

0 25m

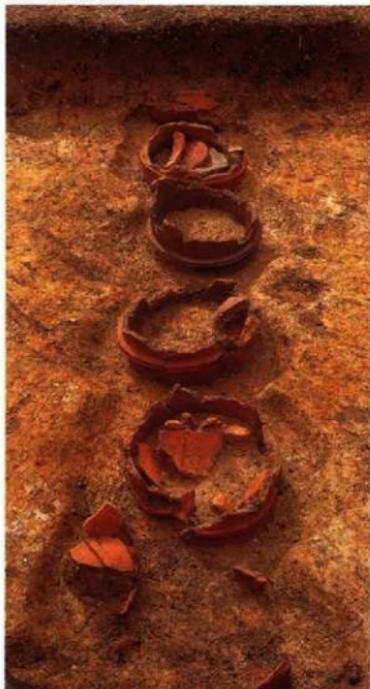
### 内濠

墳丘側と内堤側の斜面裾を確認しました。ほぼ平坦な濠底は幅約17m、現地表面からの深さ3.6mを測ります。斜面の角度は墳丘側22~25度、内堤側22度で、後円部側の調査結果とほぼ似た角度を示しています。濠の層序は地表から耕作土・崩壊土・堆積土となり、堆積土はさらに砂質粘土層と泥土層に大別できます。後円部側の内濠の調査成果と同様に泥土層の厚さが約0.8mあり、円筒埴輪やドングリ・倒木などの植物遺体を含みます。砂質粘土層は泥土層上に堆積し、各所に薄い砂層を挟んでいます。この層の上端面にあたる「すべり面」直下からはヒシの種子が出土しました。ただし、1~3次調査でみられたような今城山城築城による人为的な埋め戻しはなされていませんでした。なお、墳丘部分では滑落した墳丘土が大きく標柱して落ち込んだ状況が観察されるとともに、堆積土（砂質粘土層）の上面を堤方向にすべっている様子がみられます。



内堤横断面と断ち割り状況（南側から）

円筒埴輪列（北側から）



調査風景

## 内 堤

築造時の旧地表と盛土の状況をはじめて確認しました。旧地表の標高は西端27.3m、東端26.9mと東へ向かって緩やかに傾斜します。盛土は黄褐色粘土の拳大程度の土塊を約0.6~1mの厚さで旧地表上に積み上げたもので、埴丘の盛土状況とは異なっています。

内堤上面には側辺に平行して埴輪が南北に並び、西端部側では6個体分を検出しました。現存するのは円筒埴輪の基底部分だけですが、埴輪を据えるために掘削した溝ものこっていました。東側は搅乱をうけているために設置当初の位置を保つものはありませんでした。

## 外濠

濠底と斜面裾を確認しました。内濠とは異なり、水のない空濠でした。濠底はほぼ水平を保ち幅約19m、深さ0.6mを測ります。古墳の中軸線より北側では、古墳築造以後に掘削した幅6m、地表面からの深さ約3mの溝を検出しました。北側から内堤に沿って南流後、東へ屈曲して内濠に達しています。埋土の状況から一定量の水流があったようで、中世には埋没したと考えられます。



外濠（南西側から）



外濠と溝（西側から）

## まとめ

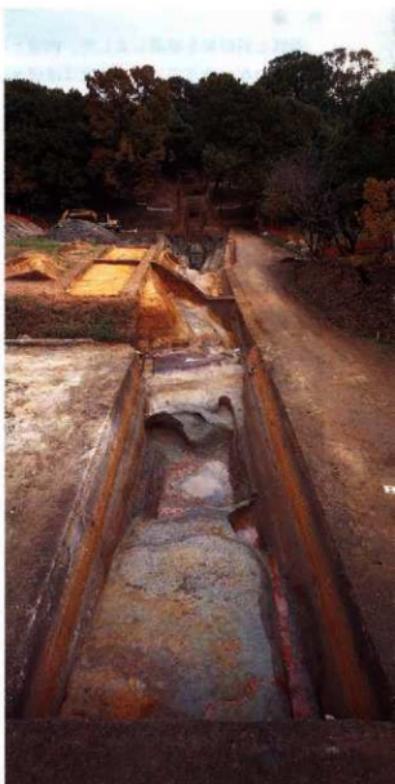
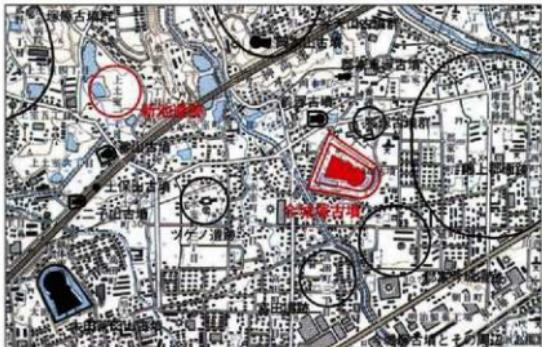
今回の第4次調査では、前方部と内堤で古墳時代の地表を確認したことにより、西から東へと緩やかに傾斜する旧地形が具体的に追求でき、墳丘はすべて盛土によって築かれた可能性がより高まりました。

前方部の現況は、中央が突出した形状となるいわゆる剣菱型となっていますが、墳丘裾端部の位置や盛土・崩壊土の状況から判断すれば、古墳本来の裾の形状は南北に一直線であったことが想定できるようになりました。さらに第1次～第3次調査から復原した後円部東端と前方部西端の基底部の距離から、墳丘裾部分の全長は190mであることがわかりました。

内濠については、前方部濠底の標高が約21.5m、後円部側約21mを測り、比高差はわずか0.5mと現地表面での1.5mに対して少い値で、濠底はほぼ平坦に掘削されていたと考えられます。泥土層は低位にある後円部側で厚く堆積する一方、水面高は前方部・後円部両側とも本来同じ高さであったことから、内濠の水面は堤等で途切れることなく一巡していたことが想定できるようになりました。

前方部と内濠で確認した盛土・埋土は地山との境で地滑りの痕跡をとどめるうえ、盛土に大小多数の亀裂が縦横に延びていました。これは、調査区での盛土全体が崩壊しつつ東から西へ瞬時に移動するという地滑りの典型的な状況を示しています。今回の大規模な地滑りの原因としては地震が最有力と考えられます。今城塚古墳築造以後に発生した地震のなかで、この地滑りにみあう規模の地震としては、1596(文禄5)年9月5日に発生した伏見地震があげられます。

今城塚古墳の盛土が一瞬のうちに崩落したのは築城時の大規模な改変などによって墳丘の劣化が進行していたところに、地震という大きなエネルギーが加わったことによるものと思われます。



調査区全景（西側から）

### 史跡・今城塚古墳 一平成12年度 第4次規模確認調査一

所 在 地	高槻市郡家新町
史跡指定	1958年2月18日
	1991年7月20日 新池津輪製作遺跡 を追加指定
指定面積	80,632m <sup>2</sup>
ア クセス	JR猪津富田駅から北へ1.5km、徒歩20分 または同駅から市バス奈佐原行き 「福祉センター前」下車、徒歩3分
編 集	高槻市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財調査センター 高槻市南平台5丁目21-1 TEL 0726-94-7562
発 行	2001年9月21日
印 刷	株式会社 日東印刷 TEL 0726-77-3711